様式第３号

令和５年度　学校経営報告書（自己評価）

学校番号	３４	学 校 名	静岡高等学校	校 長 名	織田　敦

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
ア	毎日の学習及び生活のリズムを確立する	○「規則正しい生活（生活リズムを確立）している」と自己評価する生徒 70%以上 ○「挨拶ができている」と自己評価する生徒 80%以上	○全体 65% １年 62% ２年 64% ３年 69% ○全体 85% １年 90% ２年 85% ３年 79%	B	○「規則正しい生活をしている」と自己評価した生徒は、目標の 70%には届かなった。健康面にも繋がるので引き続き生活リズムの確立を促していく。 ○「挨拶ができている」と自己評価する生徒の割合は目標を超えたが、校内での挨拶の様子を見る限りではまだ改善の余地がある。
イ	**「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を推進し、知的好奇心や探究心を喚起する**	○授業を大切にする生徒、主体的に学ぶ生徒の育成 ○「授業の内容がよくわかる」、「知的好奇心を喚起する授業が行われている」と自己評価する生徒 80%以上 ○測定ツールで把握した学力に基づき授業改善に取り組む教員 90%以上	○全体 87% １年 90% ２年 87% ３年 82% ○全体 86% １年 81% ２年 88% ３年 90% ○全体 70% １年 70% ２年 71% ３年 67% ○測定ツールにより授業改善に取り組んだ教員 100%	A	○「授業を大切にしている」「授業の内容がよくわかる」と自己評価した生徒の割合は目標を超えた。教員相互の授業参観週間や生徒による授業アンケートも授業改善に資している。また、ICT を活用した授業実践の取組が定着してきている。 「知的好奇心を喚起する授業」は目標に届かなかったが、教員は教科科目の本質や面白さを伝えることを意識して授業に取り組んでいる。 ○各教科・各学年において「学力テスト」について分析を行い、その結果が授業改善、３年生の進路指導に有効に活用されている。
ウ	**新学習指導要領に対応した教育課程への円滑な移行及び土曜オープンスクールと広報の充実を図る**	○「カリキュラム・マネジメント」の視点からのカリキュラム改善 ○中学生及び保護者等の土曜オープンスクールへの参加者数のべ 1,000 人以上 ○ホームページ更新週３回以上	○新学習指導要領に基づく新たなシラバスを年次進行で作成している。 ○７回実施、延べ 1443 人であった。 ○更新週 1.5 回程度	B	○今年度まで新課程と旧課程と併存し、複雑になっているが、成績評価は円滑に行われている。また、各教科科目においてカリキュラム・マネジメントの視点から授業やシラバスの改善に努めている。 ○オープンスクールについてはアンケート結果から参加者の満足度は高い。 ○学校ホームページは学校行事や部活動ブログなどを中心に掲載しているが、更新は週 1.5 回程度に止まった。広報の充実により努める必要がある。
エ	**低学年からの高い志の育成に努め、進路実現を図る**	○進路指導が適切に行われている 80%以上 ○入らなければ	○全体 93% １年 95% ２年 96% ３年 89%	B	○進路講演会をはじめ、多くの事業は新型コロナウイルス感染症以前の方式で実施でき、より効果的なものとなり、本物・実物の持つ力が再認識された。

様式第３号

		ならない大学を見つけた生徒の割合 80%以上	○全体 69% １年 59% ２年 68% ３年 82%		○入らなければならない大学を見つけたは全体は 69%であったが、学年進行とともに増え、３年では 80%を超えており、成果は着実に出ている。
オ	**学校行事や部活動に主体的に参加し活動するとともに、社会に貢献する**	○学校行事や部活動に積極的に取り組む生徒 85%以上 ○1 部活 1 社会貢献活動 100%	○行事 90% １年 94% ２年 91% ３年 85% ○部活 87% １年 95% ２年 86% ３年 80% ○13 の部活動で実施	B	○生徒は学校行事や部活動に積極的に参加し、充実した生活を送っている。 ○新型コロナウイルス感染症の５類引き下げ以降は概ね制限無しとなった。学校行事等はノウハウの継承も心配されたが、円滑に通常実施できた。 ○100%の目標には至らないが、５類引き下げ以降、社会貢献活動に取り組む部活動は増えている。
カ	読書習慣の定着と読書量の増大、図書館利用の推進を図る	○朝の読書週間 年２回 ○図書館開放 年 300 日以上	○６月と 11 月の２回、朝読書週間を実施できた。 ○図書館開放は年 303 日となる見込み。	A	○６月と 11 月に朝の読書週間（毎朝 25 分の読書、各 10 日間）を実施でき、概ね好評であった。 ○図書館開放を支える図書館ボランティアを対象とする図書館研修を実施した。（明治大学和泉図書館（杉並区）、新聞博物館（横浜市）） ○1,2 年生は LHR で読書会を実施した。各種広報紙や POP で更に読書への関心・意欲を高めたい。
キ	生徒及び職員が心身ともに健康で過ごすことができる校内環境を整備する	○健康観察を通しての情報共有 ○校内情報交換会　学期１回以上 ○学習環境の美化に努める生徒の育成 ○安全点検　学期１回	○毎日の健康観察表を通し担任や関係職員と情報共有できた。 ○校内情報交換会を２か月に１回程度実施した。 ○全体 76% １年 77% ２年 74% ３年 76% ○安全点検を年２回実施した。	A	○健康観察の結果は毎日集約され、管理職を含む関係者に回覧された。感染症に関わる情報等は、管理職及び養護教員に集約され、適切に対処することができた。 ○学期２回程度の校内情報交換会に加え、関係外部機関との連携について学ぶ機会を設けた。複雑な問題を抱える生徒も増加しており、スクールソーシャルワーカー等の専門家と連携をさらに深める必要がある。 ○生徒の美化意識は年々向上している（昨年 75%、一昨年 73%）。改修されたトイレは清潔に維持されている。必要な清掃用具の更新等の清掃環境を整えることができた。

様式第３号

ク	教職員の校内外の研修を充実させる	○「グラデュエーション・ポリシー」を踏まえた授業改善に向けた研修機会の充実 ○授業参観週間年２回	○「総合的な探究の時間」における発問の仕方や「心理的安全性」についての研修を実施した。 ○年２回、教科、学年を問わず授業参加した。	A	○「総合的な探究の時間」において生徒の主体的な学びを促す問いかけの手法を演習で学び、「主体的な学びや物事を多角的総合的に判断できる」ことに資する指導に活かすことができた。また、「心理的安全性」の高い集団づくりの実践に向け、共通認識、情報共有を図ることができた。 ○教員相互の授業参観週間を４月と９月に実施し、学年、教科を問わず参観し、情報交換することで授業改善の意識がより高まった。
ケ	校内外のプログラムや外部人材の活用を通して、グローバルな視野の育成及び国際交流を推進する	○各種プログラム参加者の増加と意識の向上 ○参加生徒、教職員の視野の拡大と他生徒への波及効果	○グローバルスタディーズ・プログラムの実施、PDAディベート大会に参加した。 ○国や県が主催する留学等へ参加した。 ○外国籍の大学教員による国際関係講座を実施した。 ○グローバル留学ガイダンスを実施した。	A	○グローバルスタディーズ・プログラムは 17 人が参加し、80%以上は大変良かったと評価している。 ○PDA 即興型ディベート大会や HPDU ディベート大会等に参加し、生徒はよい刺激を受けた。 ○トビタテ留学 JAPAN が再開され、第８期のマイ探究コースで１名採用され、カナダに１か月の短期留学をした。また、県のモンゴル国高校生総合交流事業に１名採用された。両名は全校生徒に海外体験発表を行った。他にも海外研修参加者による任意参加の報告会を年４回実施した。 ○外国籍の大学教員による国際関係講座を英語で実施し、グローバルな視野を広げた。 ○ISA による高校留学と海外大学進学ガイダンスを行い、進路選択の視野を広げる機会となった。
コ	**「学校における働き方改革」に組織的に取り組む**	○行事・業務の意義や必要性を見直し、整理・精選を図る。 ○産業医への勤務状況報告と指導助言の実施 毎月	○学校行事や部活動の在り方などの見直しを進めた。 ○採点ソフトを導入し、業務を軽減した。 ○時間外の多い職員に管理職面談を実施した。	A	○意義や必要性など多角的に検討し、複数の学校行事を廃止したり、テストの回数を減らしたりした。部活動については来年度から任意加入とし、また２つの部活動の活動の状況などに鑑み同好会降格や廃部を決めた。 ○採点ソフトを試行し、業務の軽減が認められたので導入することとした。 ○時間外勤務が月 80 時間を超えた職員には声掛けや、必要に応じて管理職面談を実施し、自身の働き方を見直す機会とした。

※「高校生のための学びの基礎診断」の測定ツール：本校においては「学力テスト」